



“By Love Serve”

名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学

ちゃべるにゅーす

第 35 号 2020 年 12 月 15 日



2020 年度 年間聖句

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

【コリントの信徒への手紙 1 2:26】

名古屋聖マタイ教会（名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期チャペル）

2020 年クリスマスによせて

柳城学院理事長、名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学学長
菊地 伸二

クリスマスという言葉は、英語では Christmas、すなわち、キリストのミサを意味しています。キリストによって集められた人びとの、その集まりを指し示していると言ってもよいでしょう。

クリスマスを彩る装飾の一つにクリブと呼ばれているものがあります。赤ちゃんイエスと母親マリア、父親ヨセフを中心にして、その周りにイエスの誕生を聞いてかけつけてきた羊飼いと三人の学者たちが配置されたものであり、まさしく最初のクリスマスの光景を想像させるものであります。

（2 ページに続く）



かつてわたしは、ミラノのある教会で、世界大戦時のクリスマスのクリブ（イタリアではプレゼーピオと言う）が展示されているのを目にしたことがあります。イエス、マリア、ヨセフのもとに集まっていたのは、羊飼いや三人の学者たちの姿ではなく、戦争で負傷し、あるいは疲弊しきった、心も身体もボロボロになった人びとの姿でありました。これが戦時中のクリスマスであったのかと慨嘆せずにはられませんでした。

クリスマスは、その中心にいるイエス、マリア、ヨセフというつねに変わらないキャストと、そこに集まってくる人びとという、たえず変わっていくキャストの両方から成り立っています。もう少し言うならば、最初、集まってきたのは羊飼いと学者だけだったのかもしれませんが、年を経るごとに、集まる人の数が次第に増えていったと捉えることもできるかもしれません。

そしてそれから2000年以上が経過した今年のクリスマスには、どのような人びとが集まってくるのでしょうか。そしてわたしたちは、今年、どのような思いをもって集まろうとしているのでしょうか。

* * *

神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信する者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである。

「ヨハネによる福音書」第3章16節の言葉ですが、この聖句には、その集まりの中心にいるイエスが、なんのためにこの世に来られたのかということが示されています。また、それとともに、毎年、人びとがなんのためにそこに集まってきているのかも示されています。

* * *

2020年は、日本だけでなく、文字通り、世界中が新型コロナウィルスに震撼し、心身ともに大きな打撃を受けました。わたしたちは、これまでの生活の在り方や生き方そのものまでも大幅に変更することを余儀なくされています。

じっさい、コロナ禍の中で、感染によっていのちを落とした人も多くおられますし、生き続けることへの望みを失っていった人も決して少なくはありませんでした。

ひとがこの世に生まれてくるにはそれなりの理由があるはずです。もちろん、誰しもがそのことを明確に意識しているとは言いがたいでしょうし、その理由は心の中で揺らいでいたり、あいまいだったりすることの方が多いかもしれません。

それでも、このような年の、このような時だからこそ、わたしたちに惜しみなく、いのちを与えてくださる方の声に耳を傾けることには格別な意味があるように思われるのです。

いまを、そしてこれからを生きていこうとするわたしたちにとって、欠かすことのできないことなのではないかとも感じています。

* * *

2020年のクリスマスのクリブの一員に、いのちへの道を歩もうとしているわたしたちが加えられることを心から願っています。



チャペルに展示中のクリブ（部分） 柳城キリスト教センター所蔵

トレント先生が伝えられたこと

柳城学院理事・日本聖公会中部教区主教 アシジのフランシス 西原廉太

この度、新たに学校法人柳城学院理事としてお迎えいただいた西原廉太です。どうぞよろしくお願いいたします。去る10月24日に、日本聖公会主教の按手を受け、中部教区第10代主教に就任させていただきました。当初、按手式は3月28日に予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2度にわたって延期されたものです。柳城学院のみならず、新型コロナウイルス感染症対策のために、大変ご苦労されたことと存じます。歴史的に柳城学院理事長は、初代ハミルトン主教から先代の渋澤主教まで、歴代主教が担っておりまして。本来、私が柳城学院理事長を担うべきところですが、私は立教学院・立教大学での働きも継続することと、今日、学校法人の理事長は、常勤の教職員理事によって担われるべきであること等から、菊地伸二学長に兼務いただくこととなりました。どうぞ、菊地理事長・学長をお支えいただき、さまざま困難な中にはありますが、柳城学院をさらに発展させるために、ご助力、ご加禱を心からお願い申し上げます。

さて、理事に就任にするにあたり、あらためて『柳城学院百年史』、そして、昨年末に発行されました『柳城学院百二十周年記念誌』を精読させていただきました。1898年に、マーガレット・マドラ・ヤング先生が保姆養



成を開始し、さらに、柳城保姆養成所を設立、幼児教育を通じて宣教する保育者の養成を目指すと同時に、各教会の幼稚園開設に尽力され、それが現在の柳城学院へとつながっている。この歴史とその意味は、現在、他に多数林立する保育者養成、幼児教育を専門とする諸学校には決して真似することもできない、柳城学院だけの最大のアドヴァンテージであると確信します。その意味でも、私は、ヤング先生のご貢献はもちろんですが、ヤング先生を支えたカナダからの宣教者たち、また、日本人同労者たちのお一人ひとりを、丁寧に覚えることは非常に大切であると考えています。

とりわけ、そのお一人である、エディス・M・トレント先生のお働きは、限りなく貴重なものです。トレント先生は、ヤング先生に先立つ一年前の1894年に来日され、草創期の柳城をヤング先生と共に支え、1910年に柳城幼稚園の分園として、名古屋市西区にあった聖ヤコブ教会の階下の畳敷き大広間を利用して始まった「幅下分園」を、1930年に主のもとに召されるまで大切にされました。私が2017年にカナダ・トロントにあるカナダ聖公会アーカイブスを調査した際に、今からちょうど90年前の1930年12月9日に聖ヤコブ教会で行われたトレント先生の



エディス・M・トレント先生（『柳城学院百年史』より）

葬送式の資料と共に、同労者であったロレッタ・ショウ先生による追悼文を発見しました。そこには、このような一文がありました。「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ。ミス・トレントは、すべて重荷を背負う女性たちの助け手であった」。そこには、トレント先生が「幅下分園」を通して、子どもたちへの愛の眼差しはもちろん、お母さんたちや、若い保育者の女性たち、また、柳城保母養成所で学ぶ女子学生たちへの深い愛情と共感があったことが明確に記されています。葬儀の様子を、ハミルトン主教夫人が報告されていますが、聖ヤコブ教会聖堂には、中部教区や柳城関係者のみならず、名古屋市内から一般の多くの方々が詰めかけて、トレント先生との地上での別れに涙したとのことでした。

柳城学院の「建学の精神」は「愛をもって仕えよ」です。トレント先生は、この愛をもって仕えることとは、「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ」ことである

と、その身をもって伝えてくださいました。私たちも、「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ」ことのできる保育者を生み、育てるという、柳城学院の使命——ミッション——を、これからも丁寧に担ってまいりたいと願うのです。



トレント先生（左）、柳城幼稚園創設当初共に働いた前田さとの子ども、ヤング先生、ヤング先生の最初の教え子で柳城幼稚園創設時教師の鈴木（杉浦）いねの子ども
（『柳城学院百年史』より）

「9.11 の聖人」 ～どんな時でも傍らで祈る者～

名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学チャプレン ヨセフ 下原太介



2001年9月11日、当時、アメリカ・ニューヨークにあった世界貿易センタービル北棟から、ある一人の男性の遺体が5人の消防士たちによって運び出されました。その瞬間を捕らえた写真は「アメリカのピエタ^{*}」（*十字架の上で処刑され、引き降ろされたイエス・キリストの遺体を、慈愛（ピエタ）を持って抱きしめる聖母マリアの姿）と称され、20年近くが過ぎ去った今でも世界中の人々の心の中に残り続けています。

運び出された男性の名前はマイカル・ジャッジ。彼は、その日、世界貿易センタービル北棟で、一体何をしていたのでしょうか？

その日、世界貿易センタービルは、人類史上最悪の同時多発テロ攻撃の標的の一つとなり、各地へのテロ攻撃により2,977名が死亡、25,000名以上が負傷したと言われます。イスラム過激派テロリスト集団であるアルカイダが4機の旅客機をハイジャックし、1機はペンシルベニア州郊外に墜落、1機はアメリカ国防総省本庁舎（ペンタゴン）に突入爆発、そして、残りの2機が世界貿易センタービル北棟・南棟に、それぞれ突入爆発。

ハイジャックされた旅客機1機が世界貿易センタービル北棟に突入爆発したとの知らせを受け、当時のニューヨーク市長ルドルフ・ジュリアーニは各地の消防局へ負傷者の救助活動を

至急開始する要請を出すと共に、マイカル・ジャッジに死に瀕している負傷者や悲嘆に暮れる市民、そして、命懸けで救助活動に携わる消防士たちのために、現地で祈るよう要請を出したのです。

実は、その要請を受けたマイカル・ジャッジは、ニューヨーク市消防局のチャブレン(教会以外の施設付き礼拝堂で働く聖職者)だったのです。

キリスト教国の国々では、教会に限らず、幼稚園・保育園や各種学校、病院や福祉施設、労働組合や漁港・船舶組合、警察署や刑務所、そして、軍隊や消防署等々にチャブレンが派遣されており、日々、施設内で職員と共に祈りを捧げるのと同時に、心と信仰のケアを行なうカウンセラー

として働いています。また、その働きは施設内に留まらず、戦地や紛争地、災害現場や事件・事故現場に赴き、まさに命を懸けて働く職員たちと行動を共にし、精神的支えとなったり、

その場で負傷している人々や働きの中で負傷した職員の手を握り、回復を祈ったり、時には、犠牲となった人々の無数の遺体、殉職した職員たちの遺体一体一体に臨終の祈りを唱えることも稀ではありません。

マイカル司祭は同僚の消防士たち、救急救命士たちと共に、灰色の粉塵と火災の黒煙で先の見えない、瓦礫と化した世界貿易センタービル北棟へと突入して行きました。そして、北棟の中で負傷している人々、救助活動の中で負傷した消防士たち、救急救命士たちの手を握り、共に祈り、また、犠牲となった人々の無数の遺体、自身の目の前で殉職して

いく消防士たち、救急救命士たちの遺体一体一体に臨終の祈りを唱え続けました。

その最中、北棟に隣接していた南棟も旅客機による突入爆発の攻撃を受け、先に攻撃を受けた北棟よりも早く崩壊して行きました。南棟の膨大な破材や瓦礫が北棟の上にも降り注ぎ、北棟の中にいた全ての人々を飲み込んで行きました。

世界貿易センタービル北棟・南棟へのテロ攻撃による犠牲者は2,753名。そのうち、現場で救助活動を行っていたニューヨーク市消防局の消防士等の職員の犠牲者数は343名に上ります。そして、その中の一人にマイカル司祭も。

私たちの人生は、時に大きな苦しみや悲しみに

遭遇します。そのような時、それまで自分の周りにいた親しい人々までもが、降りかかる火の粉を掃うかのように自分から離れ去り、孤独に打ちのめされてしまったという話を時折、耳にします。誰しもが、自分



自身をより良い環境・状況に置いておきたいと願い、その環境・状況が悪化したら、自分自身を守るために、その場から離れるということは当然のことなのかもしれません。そして、それは、環境・状況に限らず、人間関係においても言えることです。敢えて火の粉の中に飛び込み、自分自身を危険に晒す人などいません。

しかし、そのような生き方に流されがちな私たちであったとしても、その火の粉の先に、本当に大切な場所、心から愛する人がいたら…。

マイカル司祭は、自分がいるべき大切な場所、自分が心から愛する人々を決して見失うことなく、それらを守り抜くために、火の粉舞う



チャペルに展示中のクリブとキャンドルタワー

北棟の中に飛び込んでいきました。

今、彼は「9.11の聖人」と呼ばれ、多くの
人々に愛され続けています。

私は、マイカル司祭のチャプレンとしての
生き方に本当に大切なことを教えられます。
私にとって、決して見失ってはならない、自
分がいるべき大切な場所、自分が心から愛す
る人々は柳城学院とそこに集う全ての人々で
あると。

いつも、学校の傍らにあるチャペルで、皆
さんのことを想い、お祈りしています。

命の息を吹き入れられた

名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学チャプレン ヨハネ 相原太郎

この1年、本当にいろいろなことがありまし
た。柳城におきましては4年制大学の開学とい
う記念すべき年に新型コロナウイルスの爆発
的感染が重なりました。多くの人が激動の日々
を過ごしたのではないかと思います。クリスマ
スには一息ついて心身ともに休めるときを持
っていただければと思います。

さて、聖書の創世記には、神が世界を造った
ということが描かれています。中でも、人間の
創造については、2つの異なるストーリーが連
続して記録されています。一つは、天地創造の
6日目、神が自分に似せて人間を創造し、それ
を見て「極めて良かった」と述べた、というも
のです。もう一つは、神が土の塵で人を形づく
り、その鼻に命の息を吹き入れられた、という
ものです。

創世記は、いくつかの資料を組み合わせで編
纂された、と言われています。6日目に神に形
どって人を創造されたというストーリーが語
られたのは、自分の国であったイスラエル王国
が滅ぼされ、遠い外国の地に連行され、将来が
見えない厳しい生活を送っていた人々による
ものと考えられています。人は本来、神によっ
て創造された素晴らしいものだというこの物



語は、絶望的な状況に置かれていた人々に慰
めと勇気を与えるメッセージとなりました。

一方、第二の物語、すなわち、人間は土か
ら作られた、というストーリーが語られたの
は、先程の時代よりも、何百年も前のことだ
と言われています。その頃、イスラエル王国
は、繁栄を極めていた時代でした。そうした
時代にあってこの物語は、人間が自分たちで
何でもできる、という、人間の力への過信を
抑制する意味がありました。人間は土の塵か
ら作られたものに過ぎない。神が息を吹きか

けられたからこそ、私たちは生かされている。人間が自分の力で何でもできると思うのは間違いだ、というメッセージは、驕り高ぶる人々に反省と抑制を促すものでした。

人間の創造について、タイプの異なる2つの物語が、同じ創世記に記されていることの意味を私たちは大事にしたいと思います。すなわち、人間は、本来良いものとして、神に似せて作られたということ、しかしながら一方でそれは、土の塵で作られた弱いものであり、神の息、神の恵み抜きには存在し得ない、ということです。

現在、新型コロナウイルスが世界を席卷しています。これまで常識が覆されるような大きな不安の中で、毎日のように起こる新しい事態への対応に、私たちは翻弄されています。そんな中、人間の弱さを思い知らされることも多いかと思います。これまで当たり前に分の力でやってこれたと思っていたことが、崩れ去る思いをすることもあるかと思ひます。

そんな中で、私たち人間は弱いもの、はかないものである、ということに気付かされます。しかしながら同時に、私たちが神に息を吹きかけられて日々生かされている、ということ、思い起こすときでもあるように思ひます。

そもそも、私たちは自分で息をしているように思いがちですが、自分の力で息をしている人はいないわけです。私たちは息をさせられるようにして、生かされています。そう考えますと、私たちの一つ一つの息とは、実は、神から与えられたもの、神が吹き入れられた息によるもの、と考えても良いかもしれません。

様々な困難に翻弄されてしまったとき、ちょっと一息つき、そして、その一つ一つの息こそが、実は神が吹きかけられた息であり、神の創造の痕跡であり、その創造が今も自分の中で続いているのだということ、そのようにして、今、自分が生かされているのだということ、思いながら、新たな年を迎えたいと思ひます。

新宗教委員長・新キリスト教センター長挨拶

名古屋柳城短期大学 准教授 柴田智世



2020年4月に四大が開学したことを受けて、宗教委員会は下原チャプレン、相原チャプレン、関先生を迎えて新しいメンバーでスタートしました。宗教委員は、ほぼ全員がキリスト教信仰をもっています。生まれ育った家庭から信仰を受け継いだ人、または生きていく中で聖書に出会い、道を求めていった人と経緯は様々です。私は後者の方になると思ひます。

中学生だった頃、仏教に大変興味をもっていました。友達に誘われたことがきっかけで、日曜日になると自転車に乗ってお寺に出かけに行き、座禅会に参加していました。お経を暗唱し、住職さんの説教に耳を傾けました。この経験は、今でも温かい思い出として残っています。

高校生の時は、占いに没頭し、様々な本を図書館で借りてきては読み漁っていました。自分では判断に迷うことを、占いの力で何とかしたいと思っていたからです。一時は、占い師になりたいと考えたこともありました。

そして大学1年の時に、クリスチャンの先生から聖書や神様の話を聞くことになりました。学内サークル聖書研究会に出ませんかと誘われ、何気ない気持ちで参加しました。それが生まれて初めてのキリスト教との出会いでした。メンバーは先生と私の2人です。これまでキリスト教は外国の宗教だと思っていましたので、身近な先生から聞く聖書の話はとても新鮮で絵本の世界のような印象をもちました。

先生は事あるごとに、ご自分が神様から助けられたという話をされました。例えば、戦争が終わって食べ物がなく、一家で命を断たなければならない状況になり、そのための薬も用意していたある朝、起きて玄関を見ると食べ物が置かれていた、それは神様が助けて下さったと言いました。私はそれを聞いて(そんなことがあるはずがない。幻でも見ているのでは……?)と話半分で聞いていました。また、キリスト教は教養や知識のひとつであり、自分が信じるとかクリスチャンになるとかは別の話だと一線を引いていました。また当時、大きな社会問題となった某宗教団体のニュースが連日話題に挙がり、新聞やテレビ

をにぎわせていました。人々の意識に「宗教は怖いものだ」というイメージが広がり、私は周りの人と同調して話を合わせていました。

そのような私が大学3年の時に教会に通い始めました。聖書の話は難しい記述もあるため、全てを理解するのは一生かかることだと思っていました。しかし、神様を受け入れてこの先も歩んでいきたいと思い、決心をして洗礼を受け、今日に至っています。

昨年、一人の卒業生が研究室を訪ねてきました。話を聞くと就職先の園でうまくいかず、退職を考えていること、プライベートでも思ったように事が運ばず、非常に悩み苦しんでいる様子が見てとれました。彼女は涙を流して現在の状況を打ち明けてくれました。しばらく話をした後、彼女は鞆から本を出しました。それは入学時にもらった聖書でした。そしてこのように言いました。「“主は生きている”という言葉聞いたことがあるから、聖書から探したい。」と。

彼女は絶望的な状況の中で、藁にもすがる思いで聖書を開こうとしているのがよく分かりました。当該箇所を一緒に探して読み、お祈りをすると彼女は安心して帰って行きました。

在学中に学生に対して撒かれた種は、いつ芽を出して成長していくのか分かりませんが、私たちの理解を遥かに超えて働かれる神様に感謝します。

名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学 2020 年度宗教委員会

チャプレン 司祭 ヨセフ 下原太介
執事 ヨハネ 相原太郎
委員長 柴田智世(短期大学)
副委員長 高瀬慎二(女子大学)
村田康常(女子大学)
関綾子(短期大学)
担当事務 加藤実治(総務課)
神戸厚(総務課)



2020 年12月15日発行
ちゃべるにゅーす 第35号

発行所: 名古屋柳城女子大学・
名古屋柳城短期大学

名古屋市昭和区明月町 2-54

発行者: 名古屋柳城女子大学
名古屋柳城短期大学宗教
委員会・キリスト教センター